

【事業実績】

1. 「移民の記憶」継承事業

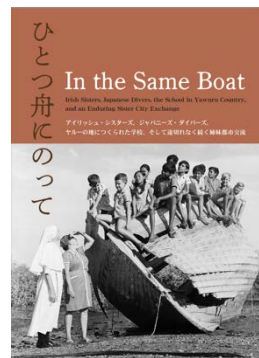
(1) ブルームの記憶継承

西豪州ブルームには熊野地域からパールダイバーとして多くの出稼ぎ労働者が海を渡って定住した。同地にはアイルランド系修道女が日系人の要請に応じて創設したセント・メアリーズ校があり、同校ならびに和歌山県太地町の生徒たちの青少年交流事業も行ってきた。しかしその歴史の継承は課題としてある。よって本事業ではまず同校の歴史を中心としたブルームの日系人史を「移民の記憶」のひとつと位置付け、博物館、教会、学校、図書館、役場等の協力を得て資料を収集し、聞き取り調査などを行った。その歴史を共有するために冊子を刊行して、パネル展示や情報共有に活用した。



日本人ダイバーの子孫、学校関係者からの聞き取り調査の様子

セント・メアリーズ校関係者からの感想「太地はもちろん太地以外の和歌山県の地域とのつながりができたことをうれしく思う。」



「移民の記憶」共有を目指して作成した冊子『ひとつ舟にのって』

(2) 海外県人会へのオンライン移民教育

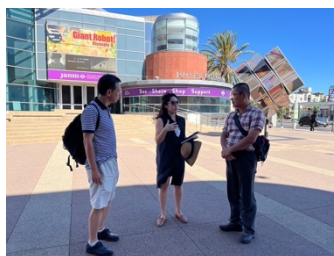
県人会も世代交代により情報や記憶の継承が難しくなりつつある。よって県人会のメンバーに向けて実施するオンラインの移民教育として、基礎編3回シリーズでの勉強会を計画。「やさしい日本語」であれば理解できる参加者もいるため、和英併記の資料を準備して一部逐次通訳も交えて実施。移民の始まりからハワイ、アメリカ西海岸、カナダ、オーストラリア、ブラジルといった移住先ごとの情報、また移民史継承のための世界の県人会との交流などを各回のテーマに据えた。南加和歌山県人会、木曜島和歌山県人会のほか、和歌山県内、沖縄県、京都市など、大学生からシニア世代まで幅広い参加があり、移民の歴史を学び、伝えていく必要性を実感する声が多く聞かれたほか、沖縄県の参加者からは、同県の移民学習の紹介もあり、学びの共有も実現できた。



勉強会参加者の感想「移民の歴史を学んでいくうち、自分自身の興味が少しずつ深まっていくのを実感しています。」「I look forward to the next lecture.」「I hope more Kenjinkai members to join the next lecture.」

(3) 学校連携に基づく和歌山移民教育の実践と教材製作

社会科教員2名をカリフォルニア地域の現地調査研修に派遣。全米日系人博物館での受け入れによって、多様な資料や地域の文化的背景を学ぶ機会を設けた。研修後の報告会では県内外の歴史教育者、他教科教員、JICA 横浜 海外移住資料館も交えて、地域の歴史や文化から現代の社会課題につなげる方策などを議論した。その結果、美術資料の歴史教育への活用にとどまらず、より現代的観点に寄せた公民での多文化共生という視点で授業を行った。また移民としてアメリカに渡り画家として活動した石垣栄太郎についての学習冊子を太地町歴史資料室と連携して作成したほか、昨年度から継続する高校美術科教員は、全米日系人博物館によるオンライン授業「バーチャル訪問」を活用して授業を展開。オンラインでの作品鑑賞とディスカッションのほか、海外移住資料館の教材も活用して、教育における多様な博物館利用を実践した。



教員による現地研修の様子



学芸員が協力した授業実践

中学校社会科教員「自分の意識が大きく変わり、教科内容としてではなく、歴史を通じて何を学ぶのか、個々の人間という視点を強く抱くようになった。」中学生の感想「自分の先入観に気づけた」「相手を個人として捉えられるようになりたい」「違いが当たり前と感じると差別は少なくなるのでは？」高校美術科教員「美術作品を通じて移民の歴史や異文化に触れる体験は価値がある。複雑なテーマについて作品を通じて深く考える生徒の姿が見られた。」



石垣栄太郎学習冊子

2. 日本版ジニアロジーの確立に向けた調査と情報共有

(1) ルーツ調査先進事例調査とシンポジウムの実施

移民の歴史を資源とする観光、自分のルーツを探り、先祖の故郷を訪れる「ルー



アイルランドの土地登記関係アーカイブ調査の様子

「ツ・ツーリズム」の市場が拡大している。日本においても、戦前・戦後に北米・南米等へ移民した日本人の子孫が、高い関心を示している。本事業では先進事例であるアイルランド・スコットランドにおける関係機関の取り組み、連携等の実態調査を行った。個人情報の取り扱いやデジタル公開などの在り方に日本と大きな相違があるが、日本においても図書館や公文書館では積極的なデジタル化を進め、すでに利用可能なデータベースやデジタルコレクションなどを含めたルーツ調査ガイドなどの作成及び多言語化が期待される。12月20日にはこの調査をもとに、オンラインシンポジウムを開催し、専門家であるジネオロジストの機能・役割、並びに移民に係る展示の在り方についても検討した。

(2) ジネオロジー関連資料の撮影

これまで、移民の子孫から祖先の居場所を探したい等の問合せがあった際、『日米住所録』などで確認ができた事例がある。所定の手続きを経て個別に閲覧を許可してきたが、資料の劣化が危惧される状況でもあった。よって和歌山大学紀州経済史文化史研究所に所蔵している寄贈資料のうち、渡米者の先祖捜しに関して有効と想定される『日米住所録』や「年鑑」等の資料を選択し撮影した。順次公開を行っていく。



オンラインシンポジウムによる報告
https://www.youtube.com/watch?v=Q7rHLv_RX1I

シンポジウム参加者の声「ジネオロジストなどの専門職があることなど参考になる点が多かった」「ルーツ調査の先進事例、資料の所在、アーカイブについて知ることができた。」「新しいビジネスの可能性を感じた。」



資料撮影の様子

3. ネットワーク構築と情報共有

(1) 日系ミュージアム等とのネットワーキング

近年、市民活動により立ち上がって公開が始まったコロラド州の日系人収容の歴史に関する展示施設を訪問し、関連研究者らとのネットワーキングを行った。同地の調査によって、新たに和歌山ゆかりの美術家が発掘されたほか、同地の美術館における地域美術史の再検討について、関係者と議論の場を設けることができた。



コロラド州アマチミュージアム

(2) 国内所在移民美術資料の調査と連携作業

国内所在移民美術資料の調査と情報共有を目的に、南房総地域の地域史研究を行っている NPO 安房文化遺産フォーラムを訪問、同地を調査した。房総半島と和歌山県は、古来より海路による文化的なつながりがあり、移民先での交流の可能性を検討している。近代史および地域史の視点を大きく広げる可能性も含めて美術と歴史の双方向から調査を行ったが、さらなる今後の連携可能性を検討したい。



NPO 安房文化遺産フォーラムとの意見交換

(3) 国際シンポジウムの実施

過去には和歌山において実施したシンポジウムをアメリカロサンゼルスで開催計画。アカデミックな関係者だけでなく、移民にルーツや関心を持つ一般の聴衆にも向けて、内容を構成した。同地で最も長い歴史を持つ日英バイリンガル新聞『羅府新報』において告知、取材も受けてプレゼンスを高めることができたが、同地の山火事の影響により、急遽オンラインでの開催に切り替えざるを得なかった。しかしながらシンポジウムの概要冊子も和英併記で製作、同時通訳付きの実施により、現地1月18日(土)、日本時間では1月19日(日)朝6時からの開催であったにもかかわらず、200人以上が参加登録、当日は日米に加えてカナダ、オーストラリア、ドイツから、157人が参加した。現地での実施が叶わず、意見交換においては限定的となったことは残念であったが、参加者からは大きな反響を得た。



上：オンラインシンポジウムの様子
 右：シンポジウム概要冊子



シンポジウム参加者の声「日本とアメリカ双方の聴講者を対象にした取り組みである点がよかった」「このようなミュージアム連携の取り組みが、後進の研究のためのノウハウになると思う」「美術館だけでなく、地域の教育文化機関と連携した取り組みで、非常に有意義だった」「現在における移民や外国人労働者の問題の解決に活かしていくという提言がとても重要だと感じた」「コミュニティを複数の存在として捉え、それらの関係性を考えていくべきという指摘にも刺激を受けた」「グローバルゼーションのもと移民研究も再規定され、新たな意義を有する地球市民の問題であることを再認識した」